

コーナー配置と使われ方の関係

一子育て支援施設のコーナー配置と使われ方の空間実験 その2ー

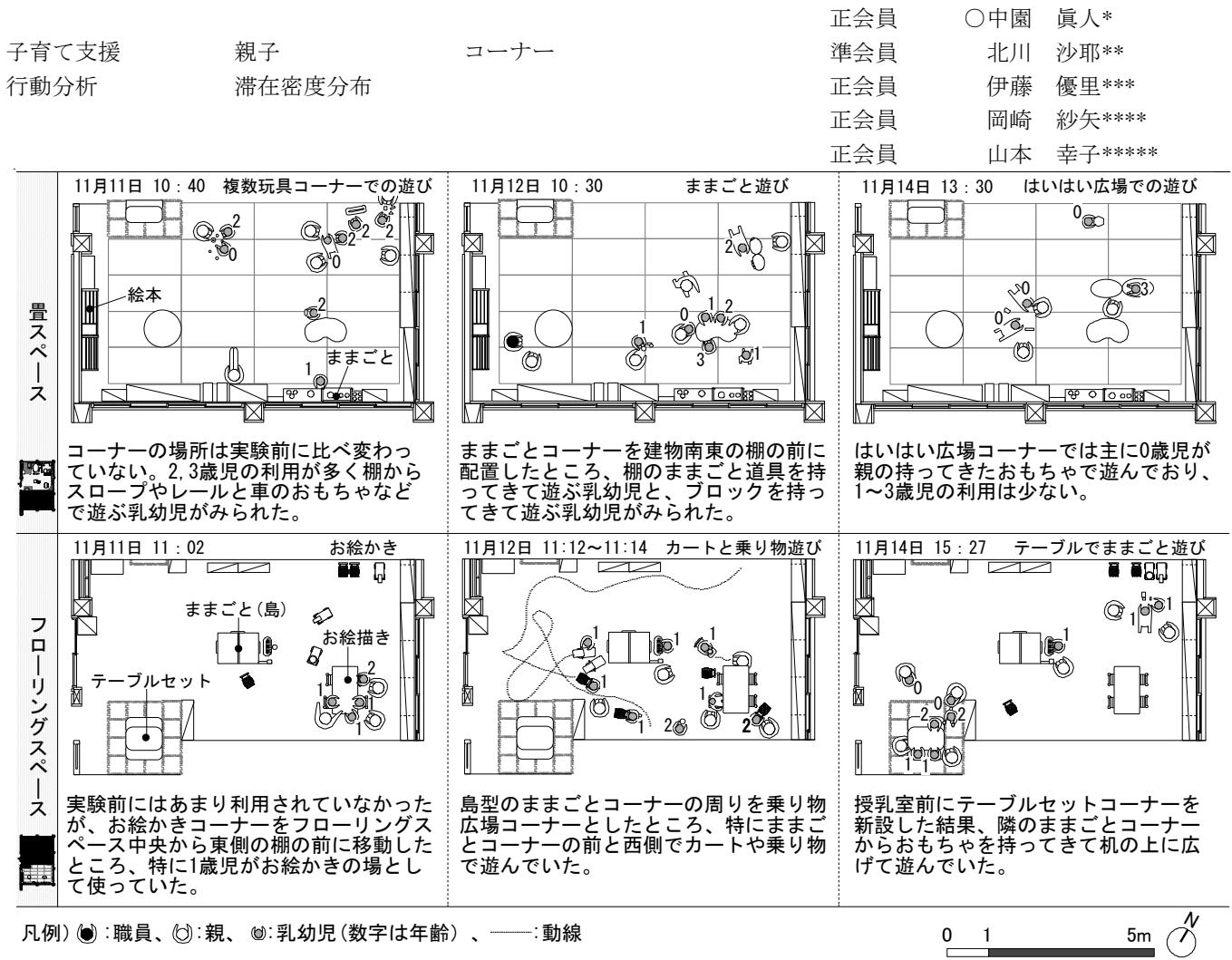


図1 自由遊び (空間実験1:畳スペース拡充型)

1. 序論

前報では、ワンルーム型子育て支援施設の空間実験前から空間実験1(畳スペース拡充型)及び空間実験2(フローリングスペース拡充型)でのコーナー配置の変更点及び施設の利用形態について論じた。

本報では使われ方調査の結果を基に利用者の行動を分析し、コーナー配置による行動変化の比較分析を行う。

2. 空間実験1(畳スペース拡充型)の使われ方

施設での1日の生活プログラムのうち、主に自由遊び時における実験後の使われ方を示す。まず空間実験1での畳スペースにおける遊びについて、ままごとコーナーではコーナー内の座卓にままごと用玩具を運んで遊んだ

り、フローリングスペース側の柵からブロックを持ってきて親の側で遊んだり、年齢に関係なく多くの乳幼児たちが遊んでいた(図1-上段)。親も多く滞在しており、異なる年齢の子を持つ親のコミュニケーションスペースとなっていた。畳スペースでは、実験前には1~3歳児も多く滞在していたが、空間実験1で乳児スペースと位置づけて玩具をまとめたことにより主に0歳児が滞在する場となり、親が渡した玩具や、他の乳児が出したままにしていた玩具のところまではいはいして遊ぶ等の行為が見られた。複数玩具コーナーは2,3歳児の滞在が多く、0歳児・1歳児は実験前と比較すると減少していた。しかし、0歳児と2歳児が一緒に遊ぶなど、異年齢児同士の交流も見られた。

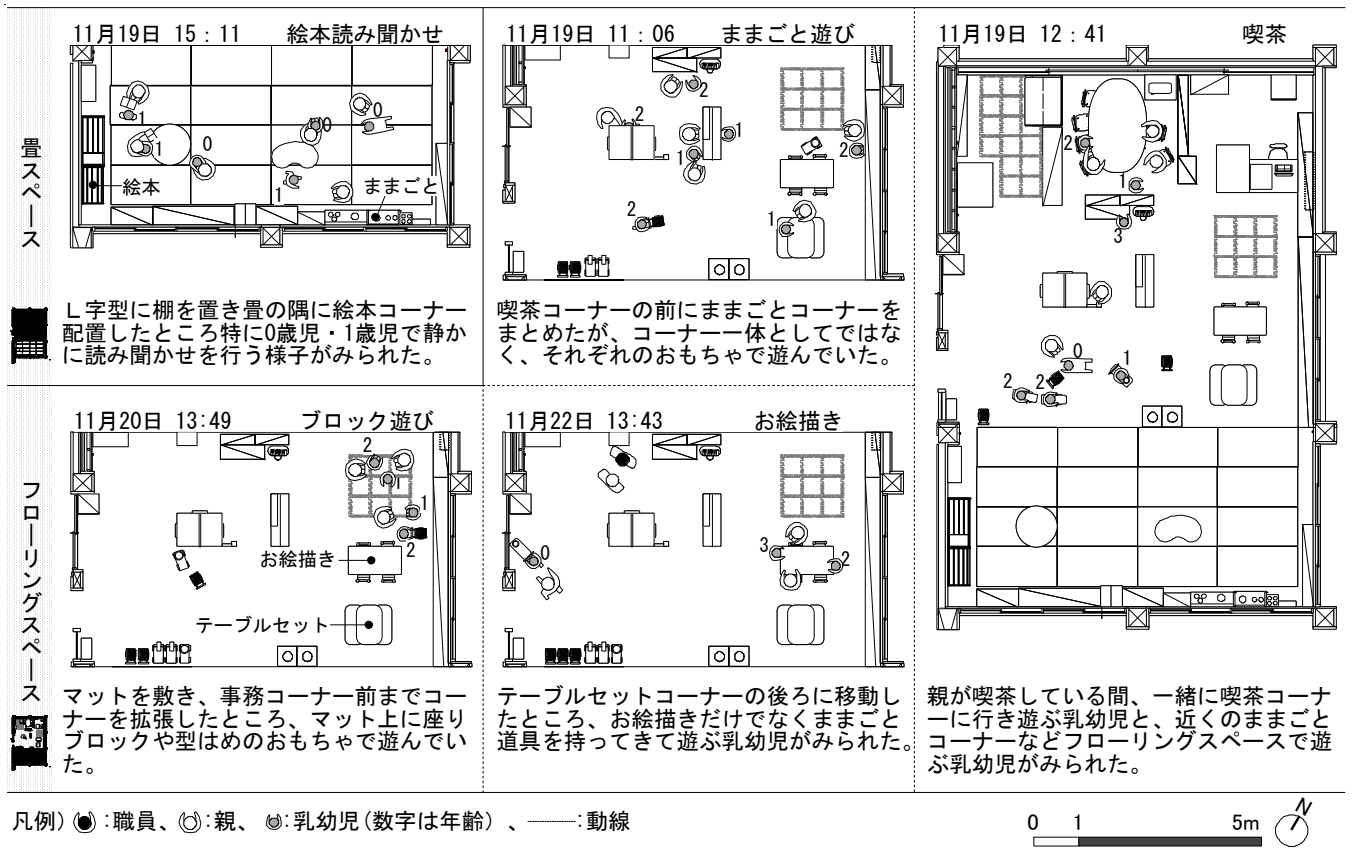


図2 自由遊び（空間実験2：フローリングスペース拡充型）

次に、フローリングスペースでは、カートや乗り物等、動的遊びがフローリングスペース全体を使って行われていたが、お絵描きコーナーと玩具棚との間や荷物置き場の他、テーブルセットを設置したにも関わらず授乳室までカートを押して入っていく乳幼児も見られた（図1-下段）。お絵描きコーナーは、実験前にはフローリング中央に位置し、あまり利用がなかったが、お絵描き道具を置いた棚の横に移動したことにより、特に1歳児の滞在が増加した。そして、授乳室前に新設したテーブルセットでは隣のままごとコーナーから玩具を運んで椅子に座って遊んだり、ままごとコーナーの子と低い棚を挟んで遊んだりする光景が見られた。また畳スペースと隣接しているため畳側からははいはいしてきた0歳児がテーブルにつかまり立ちする姿も確認できた。

### 3. 実験2（フローリングスペース拡充型）の使われ方

空間実験2での畳スペースにおける遊びについて、ままごとコーナーと複数玩具コーナーでの遊びは空間実験1とあまり変化はなく、異年齢児が同じ場所で遊んでいる（図2-左上）。絵本コーナーは畳スペースの隅にL字型に棚を設置し、他の遊びとの重複を防いだこともあり、実際に読み聞かせの場所として利用されていた。

次に、フローリングスペースでの遊びについて、ブロックコーナーではマットを敷いたことにより、マットに

座って型はめやブロックを使って遊ぶ乳幼児が見られた（図2-左下、中央）。0歳児の場合、親が傍にいて長時間滞在していた。また、多くの親が集まり座って会話する姿もあった。お絵描きコーナーは空間実験1では1歳児の滞在が多かったのに対し、空間実験2では2,3歳児の滞在が多かった。また、椅子に座ってお絵描きをするだけでなく、棚とテーブルの間のスペースに座り込んで遊ぶ姿もみられた。テーブルセットはプレイルーム東側の玩具棚近くに移動したことにより、0歳児の滞在が減少し、ままごとやブロック・型はめ、その他の玩具などの多様な遊びに使われるようになった。ままごとコーナーはコーナー全体で一体として使われるのではなく、個々の玩具ごとに使い遊ぶ乳幼児が多かった。また、家の中に入りたがる乳幼児が多く、多い時には3人程度が中に入り遊んでいた。その際、家の周囲に親が座り乳幼児と遊びつつ会話する姿が見られた。のりもの広場はカートや乗り物置き場を授乳室側に移動したことにより、畳スペース拡充型では乗り物にはまたがるがあまり移動せず、事務スペース前に固まっていた乳幼児が移動するようになった。また、カートにぬいぐるみをのせて押して遊ぶ乳幼児が多くみられた。喫茶コーナーでは親の喫茶だけでなく、工作でも使われていた。

親の喫茶時の乳幼児の遊びについて、喫茶コーナー入口には棚と仕切りを設置し、乳幼児の侵入を防いだが仕

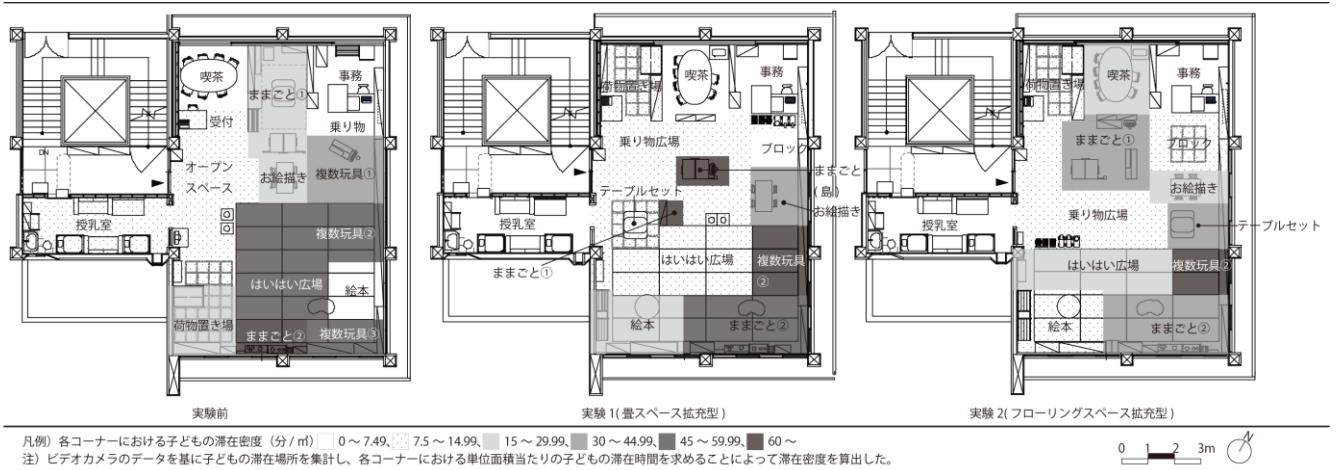


図3 滞在密度分布

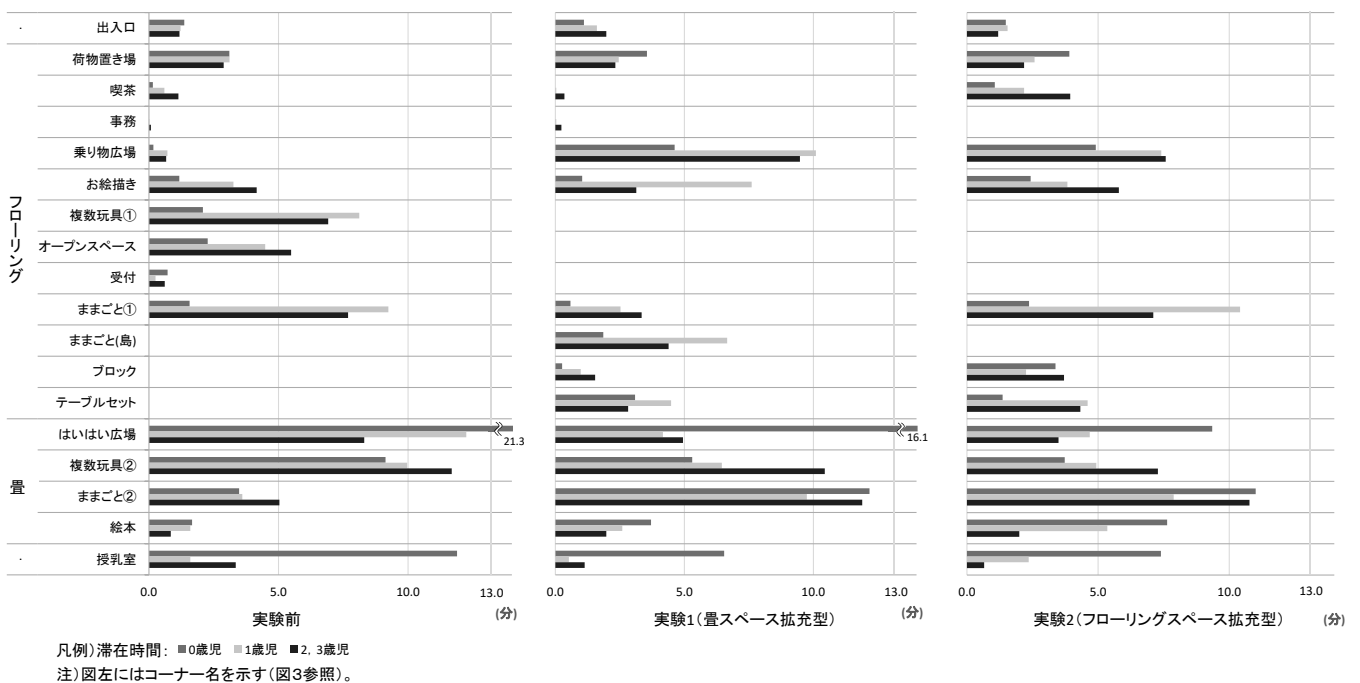


図4 1時間当たりの各コーナー滞在率

切りを移動し中に入って遊ぶ乳幼児がみられた(図2-右)。しかし、主にフローリングスペースで、一人で遊ぶ乳幼児も多かった。また、コーナーの周囲に施設全体を座ったまま見渡すことができる実験前よりも低い棚を配置したことで、ままごとコーナーから親と話す乳幼児もみられた。

#### 4. 各コーナーにおける乳幼児の滞在率

図3にコーナー配置パターンごとの各コーナーの滞在時間密度の分布を示す。実験前は畳スペースでの滞在が多く、特にままごとコーナーの滞在時間が長かった。また、荷物置き場での滞在時間も比較的長くなっている。これは、荷物置き場とおむつ替えコーナーが畳スペース横にあり、遊び場と利用されることが多かったためだと

考えられる。授乳室も畳スペース拡充型・フローリングスペース拡充型に比べると密度が高くなっている。この一因として兄弟で来所し、下の子は授乳室にあるベビーベッドに寝かされていたことが挙げられる。

空間実験1では、ままごとコーナーと複数玩具コーナーの滞在時間が長かった。実験前のままごとコーナーは、3方を囲まれていたのに対し畳スペース拡充型では島型と畳に隣接した形となり利用しやすくなったのではないかと考えられる。実験前に比べ、はいはい広場コーナーの滞在時間が減ったが、これは棚を整理しままごとコーナーを移動したことで、玩具を運んでははいはい広場コーナーで遊んでいた1~3歳児が南東側の棚近くで遊ぶことが増えたからだと考えられる。また、新設したブロックコーナーの滞在がが少ない。これは、フローリングスペース

は底冷えがするためあまり使われていなかったためだと考えられる。

空間実験 2 では、空間実験 1 に比べて喫茶コーナーとブロックコーナー、テーブルセットコーナー、はいはい広場コーナーでの滞在時間が増加している。ブロックコーナーはマットが敷かれたことにより、それまでテーブルや畳スペースに型はめやブロックを運んで遊んでいた乳幼児がコーナー内で遊ぶようになったため、滞在時間が増加したのだと考えられる。喫茶コーナーは利用する親が多く、一緒に配行って遊ぶ乳幼児も多かったため増加したのだと思われる。

1 時間当たりの年齢別の各コーナー滞在率を図 4 に示す。まず、フローリングスペースのコーナーについて分析する。実験前と空間実験 1 に比べ空間実験 2 では喫茶コーナーの 1~3 歳児の滞在率が高くなっている。これは親の喫茶の際に一緒に入るだけでなく、工作でも使っていたためである。また、実験前はカートや乗り物置き場程度で狭かったため乗り物広場コーナーの滞在率は全年齢で大幅に増加している。お絵かきコーナーは空間実験 1,2 で利用する年齢層に違いがみられた。テーブルセットコーナーは位置を変えたことにより 0 歳児の利用が減り、2, 3 歳児の利用が増加した。

次に畳スペースのコーナーでは全年齢で絵本コーナーの利用率が大きく上昇した。また、実験前には年齢に関係なく滞在率の高かったはいはい広場コーナーでの 1~3 歳児の利用率が下がり、おおむねコーナーによって乳児と幼児の滞在場所を分けることができたといえる。空間実験 1,2 では共に全年齢で複数玩具コーナーとままごとコーナーの利用率が高い。これは畳の隅に座り乳幼児を見守る親がいるため、その近くで遊ぶ乳幼児も多いことが一因だと考えられる。

## 5. 結論

本論で得られた知見は以下のとおりである。

- 1) 実験前には、縦：6 枚、横：3 枚の計 18 枚の畳マットが配置されていたが、空間実験 1 (畳スペース拡充型) は縦：5 枚 (一部 4 枚)、横：4 枚の計 19 枚に増やした。空間実験 2 (フローリングスペース拡充型) はそれより 1 列分減らし、縦：4 枚、横：4 枚の計 16 枚を南側前面に配置した。
- 2) 空間実験 1,2 では、畳スペースを乳児スペースと位置づけ、プレイルーム南側の隅には L 型の絵本コーナーを配置した。フローリングスペースには、ままごと・

ブロック・お絵描きコーナーを配置し、乗り物遊びを行う場も確保した。

- 3) 荷物置き場・おむつ交換台は受付奥のスペースに移動し、受付後のスムーズな荷物の片づけを促すとともに、遊びスペースと区別した。喫茶コーナーは、北側中央に移動し、プレイルームと垂直にテーブルを配置した。
- 4) 実験前にはプレイルームの北側中央に配置されていたままごとコーナーを、空間実験 1 では 2 か所に分け、空間実験 2 では喫茶コーナーの前に、1 ヶ所にまとめて配置した。
- 5) 実験前は、荷物置き場とおむつ替えコーナーが遊びの場の延長として使われることが問題であったが、配置変更後は受付後の荷物の収納がスムーズになり、おむつ替えコーナーの遊び場としての利用も減少した。
- 6) 絵本コーナーは他の遊びと重複してほとんど利用されていなかったが、変更後は静かに利用できるようになり利用率が上がった。
- 7) 空間実験 1 ではブロックコーナーは 1~3 歳児の滞在が多かったが、空間実験 2 ではマットを敷いたことにより 0 歳児も親が連れてきて遊ばせることが増え利用率が上がった。また 1~3 歳児の利用率も上昇し異なる年齢の乳幼児と一緒に遊ぶ光景もみられた。
- 8) 畳スペース横のままごとコーナーと複数玩具コーナーはコーナー配置のパターンに関わらず、異なる年齢の乳幼児と親が交流するコミュニケーションスペースとして機能している。
- 9) はいはい広場コーナーは、実験前は棚の玩具が整理されておらず異なる年齢の乳幼児が同じ場所で遊んでいたが、畳スペース周囲の棚の整理等により、空間実験 1,2 では概ね乳児と幼児の滞在場所の分化が行われた。以上よりコーナー配置を変化させることで異なる年齢の乳幼児の交流の場や親のコミュニケーションの場をつくること、乳幼児の年齢に応じて滞在場所を分けることができると推測される。このことから、発達段階の異なる乳幼児と親が同一の空間で過ごす子育て支援施設においてコーナー同士の関連付けやコーナーの場所の見直しを行うことが必要であると考えられる。

\* 山口大学大学院創成科学研究科 教授・工博  
\*\* 山口大学工学部感性デザイン工学科 学部生  
\*\*\* 山口大学大学院理工学研究科 博士後期課程  
\*\*\*\* 山口大学大学院理工学研究科 修士課程  
\*\*\*\*\* 筑波大学システム情報系 助教・博士 (工学)

\* Prof., Graduate School of Sciences and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr. Eng.  
\*\* Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.  
\*\*\* Doctoral Course, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., M. Eng.  
\*\*\*\* Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ.  
\*\*\*\*\* Assistant Prof., Faculty of Eng., Info. and Systems, University of Tsukuba., Dr. Eng.